

特別史跡 三内丸山遺跡

史跡整備基本設計 報告書

令和3年3月

三内丸山遺跡センター

目 次

- 1 特別史跡三内丸山遺跡の概要
- 2 基本設計の目的
 - (1) 基本設計の目的
 - (2) 検討経過
 - (3) 検討結果の概要
- 3 設計条件の整理
 - (1) 対象範囲
 - (2) 現況
 - (3) 整備対象とする遺構等
- 4 基本設計
 - (1) 環状配石墓
 - (2) 大人の墓（立体表示）
 - (3) 大人の墓（露出展示）
 - (4) 南の谷・北の谷
 - (5) 子供の墓
 - (6) 北盛土
 - (7) 南盛土
 - (8) 大型掘立柱建物跡
 - (9) 西盛土周辺
 - (10) 植栽・修景・縄文植物園
 - (11) 便益施設
 - (12) 史跡西側法面保護
 - (13) サイン・史跡標識
- 5 事業計画
- 6 費用の概算

1 特別史跡三内丸山遺跡の概要

三内丸山遺跡は、青森市の中央部を北東へ抜けて青森湾に注ぐ沖館川の右岸台地上に営まれた 35 ヘクタールに及ぶ縄文時代前・中期の大規模な集落跡を中心とした遺跡である。

古く江戸時代から菅江真澄などの紹介によって知られていたが、戦後になって慶応義塾大学考古学研究室が小規模な学術調査を実施した。昭和 48 年から 51 年には、県営運動公園の建設にともなう発掘調査が県教育委員会によって行われ、その後も継続的に開発事前の調査が青森市教育委員会や青森県教育委員会によって実施されてきた。平成 4 年に至って遺跡全体の範囲を超える大規模な運動公園の整備拡張が計画され、県教委によってまず北側の北地区で野球場の建設部分 5 ヘクタールについて事前調査が開始された。2 年後の平成 6 年 7 月になって重要性が確認されるに及び保存が決定された。現在は遺跡の内容や性格を確認するための発掘調査が実施されている。

本遺跡は、陸奥湾西部の青森湾の南岸に広がる青森平野に向かって南から延びる八甲田山の北麓に位置し、沖館川が形成した標高 10 メートルから 18 メートルのほぼ平坦な中位段丘に立地している。北西を流れる沖館川とは比高 7 メートルから 8 メートルの急崖をなし、北東からは大きな谷地が樹枝状に入り込み、その一部は北地区の南や遺跡南東側に延びて谷頭を形成している。また沖館川に面した北斜面と中央谷と呼んでいる北斜面中央に入る小さな谷には、下位の低湿地部分に有機物を多く含む泥炭質シルト土壌が堆積している。なお周辺には沖館川左岸の三内沢部遺跡や三内霊園遺跡、北西側の谷を挟んで三内遺跡が所在するなど、三内丸山遺跡と並行する時期の生活痕跡をもつ遺跡が隣り合わせで集中している。

遺跡が本格的に営まれ始めたのは、縄文時代前期中葉で、北地区の中央谷から台地中央にかけて竪穴住居・土坑墓・埋設土器が配置され、中央谷から北斜面に廃棄場が形成され始めた。中央には大型竪穴住居が設置され、中央谷の西側にかけて居住域が営まれ、その北側には誕生前後から幼少時に死亡した子どもたちの墓と考えられる埋設土器が密集している。おとなの墓と推定できる土坑墓は、中期の南盛土に覆われているため詳細は不明であるなど、保存が決定されたため調査が及んでいない部分も多い。また、とくに中央谷には、谷に沿った東側に土留め用杭列が路肩に打ち込まれた幅 1 メートルから 2 メートルの道が、約 90 メートルにわたって沖館川に延びていると推定されている。

中央谷と北斜面の前期に属する低湿地からは、土器や石器のほかに木器・編物製品・骨角器および多量の動植物遺体などが発見されている。木器には、鉢・漆塗り台付皿・掘棒・櫛状木製品・ヘラ状木製品・漆塗り竪櫛・柱材などがある。編物製品は、イグサの仲間で編まれた小型カゴ(※注)、蔓のようなものを組んだ紐などがある。骨角器には、釣針・銚・ヤスなどの漁撈具、縫い針・ヘアピン・管玉・牙製の垂飾品や腕輪などの装身具、鯨骨製の骨刀などがある。植物遺体には、ニワトコ・ヤマブドウ・ヤマグワなどの種子や割られたクルミ殻やクリ果皮片などが発見され、栽培植物と考えられるゴボウ・ヒョウタンの仲間・マメ科の種子などが少量ながら確認されている。また縄文時代には一般的なシカやイノシシが少なく、ムササビやノウサギなどの小型獣、ガン・カモ類や

ウ・アビなどの鳥類も相対的に多い。魚類には、カツオ・マダイ・ブリ・アジ・サバ・ヒラメ・カレイとイワシ・ハゼ類などの小型魚も多く発見されている。

中期になると集落は拡大し、北地区全体に広がる。住居は引き続き中央谷の西側と東斜面に構築され、大型竪穴住居は台地中央部から北側に位置し、台地中央部には列状の土坑墓が出現した。新たに貯蔵穴が中央谷の東側の沖館川に面した台地の縁辺部に密集し、東西棟の掘立柱建物が台地中央に 10 棟近く縦列し、西側には数棟が横列して出現した。さらに台地北西端のやや高いところに、太さ 1 メートル前後のクリの巨木を間隔 4.2 メートルで 6 本の長方形に配置した遺構があり、これを大型掘立柱建物とする見解がある。この周辺にはやや小規模ながらほぼ同様な遺構が、数回建て替えられている。いわゆる「盛土遺構」も南北と西側の三か所に形成され始めた。

やがて中期半ばになると北地区ばかりでなく、野球場部分の南側の谷を挟んだ南側の南地区、さらに谷を挟んだ南東のかつて近野遺跡と呼んだ近野地区に遺跡範囲が広がった。北地区の「盛土遺構」はますます大型化し、埋設土器や列状墓も中期後葉になるまで引き続き構築され、この時期のものが最も多い。

列状墓を含む北地区の土坑墓は合計 155 基が発見され、ヒスイ製の装飾品 1 点や石鏃 10 点や、磨石・敲石・凹石等が副葬された場合がある。列状墓は、長軸約 1.4 メートルの楕円形や隅丸長方形が主体で、平均約 15 メートル幅の道に長軸を直交させ、北地区の中央部から北東に 210 メートル以上にわたって道に沿って 2 列に延びる。

中期の埋設土器は、北地区から約 760 基が発見され、磨石・敲石や石鏃など土坑墓と共通する副葬品が入れられている。また粘土採掘穴が、北地区の谷の東側と南斜面に掘られたのは中期後葉である。さらに先の運動公園建設時や現在実施している確認調査では、南地区には中期後半を中心として北東斜面に竪穴住居や柱穴群が営まれ、一段高い尾根上には南北 2 列に並ぶ土坑墓、西側斜面には土坑墓や配石遺構が築かれた。さらに近野地区では、大型竪穴を含む中期の竪穴住居群が確認されている。しかし、中期終末に集落は急激に縮小し、北地区の中央谷の西側に住居や土坑だけとなり終焉を迎えた。

「盛土遺構」は、炭化物・焼土・地山土などが厚さ約 5 センチメートルから 10 センチメートルで径 1 メートルから 2.5 メートルほどに広がる単位が累積したもので、南北約 70 メートルで東西 35 メートル前後の範囲にうずたかく積まれて遺物を多量に含んでいる。土偶・ミニチュア土器・各種の土製品や石製品が非常に多い。土偶は遺跡全体から約 700 点発見されているが、その約 9 割は「盛土遺構」から発見されている。なお本遺跡周辺では調達しえない黒曜石・アスファルト・ヒスイやコハクなどは、遠隔地との交流を物語っている。

本遺跡は、東北北部から北海道南部における縄文時代前期半ばから中期末に及ぶ大規模で拠点的な集落の実態と変遷の様相を良好に示す。とくに 35 ヘクタール以上にも及ぶ範囲に約 1,500 年も営まれ、道を軸にして掘立柱建物や列状の土坑墓などの各種の遺構が計画的に配置された集落の様相は、当時の組織化された社会構造をあわらしている可能性さうかがわせる。また北の斜面や中央谷の低湿部には有機質の道具類や動植物遺存体が良好に保存され、当時の道具類の全体像や生業・食生活さらには自然環境に関

する豊富な情報を内包している。膨大な量の遺物も合わせて、わが国の縄文文化の様相を雄弁に物語っている。よって史跡に指定し、その保存を図ろうとするものである。

(『月刊文化財』平成8(1996)年12月号 第399号より、指定説明部分を転載)

(※注) 平成6年の分析により、小型カゴの素材はイグサ科の植物として展示解説及び発掘調査報告書等にその旨を記載してきた。しかし、平成23年、東北大学の鈴木三男教授(植物系統学・植物解剖学・古植物学)による資料組織の顕微鏡観察により、「針葉樹のヒノキ科の樹皮製」であることが判明した。

2 基本設計の目的

(1) 基本設計の目的

青森県教育委員会は、令和2年3月に『特別史跡三内丸山遺跡整備計画』（以下、「整備計画」という。）を策定した。

令和2年度は、整備計画の内容を、遺構の保存との整合性を図りつつ、技術、経費等の諸条件を踏まえ設計図書をまとめるため、「三内丸山遺跡史跡整備基本設計検討委員会」（以下、委員会）という。」を設置した。

委員会は3回開催され、遺構の修復、地形造成、遺構の表現及び公開施設、設備等について検討を重ねた。

表1 三内丸山遺跡史跡整備基本設計検討委員会 委員構成

分野		氏名	所属
文化財保護専門家	考古学	岡田 康博	青森県企画政策部理事 (世界文化遺産登録推進室長事務取扱)
	古環境学	辻 誠一郎	東京大学名誉教授
	保存科学	石崎 武志	東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター長
	県文化財保護審議会委員	工藤 竹久	青森県文化財保護審議会

(2) 検討経過

① 第1回（令和2年10月29日）

ア 議事内容

- (ア) 基本設計の検討内容について
- (イ) 環状配石墓について
- (ウ) 大人の墓について子供の墓と谷部について
- (エ) 子供の墓について
- (オ) 北の谷と南の谷について
- (カ) 史跡外周法面保護について

イ 検討内容

- ・ 設計にあたり、過去の整備で施された盛土の範囲と厚さを再確認する。
- ・ 立体表示や覆屋内での露出展示等の問題点と課題を再整理し、整備における考え方・使い分けを検討する。
- ・ 整備対象（遺構や施設・設備）ごとの数量・工法等を検討する。遺跡が存在していた当時の自然環境を表現するための整備手法を検討する。

② 第2回（令和3年1月29日）

ア 議事内容

- （ア） 第1回委員会での指摘事項への対応状況について
- （イ） 環状配石墓
- （ウ） 大人の墓
- （エ） 子供の墓
- （オ） 大型掘立柱建物跡
- （カ） 北盛土
- （キ） 南盛土
- （ク） 北の谷・南の谷
- （ケ） 西盛土付近
- （コ） 法面保護
- （サ） 動線計画・サイン
- （シ） 園路改修・水道・電気

イ 検討内容

- ・ 設計にあたり、過去の整備で施された盛土の範囲と厚さを再確認する。
- ・ 立体表示や覆屋内での露出展示等の問題点と課題を再整理し、整備における考え方・使い分けを検討する。
- ・ 整備対象（遺構や施設・設備）ごとの数量・工法等を検討する。
- ・ 当時の自然環境を表現するための整備手法を検討する。

③ 第3回（令和3年3月9日）

ア 議事内容

- （ア） 第2回委員会での指摘事項について
- （イ） 縄文植物園について
- （ウ） 基本設計最終案について

イ 検討内容

- ・ 設計にあたり、過去の整備で施された盛土の範囲と厚さを再確認する。
- ・ 立体表示や覆屋内での露出展示等の問題点と課題を再整理し、整備における考え方・使い分けを検討する。
- ・ 整備対象（遺構や施設・設備）ごとの数量・工法等を検討する。
- ・ 遺跡が存在していた当時の自然環境を復元するための整備手法を検討する。

（3）検討結果（整備方針）

ア 展示手法

各遺構は、遺構の状態や展示目的により、露出展示、立体表示、レプリカ展示を行う。

（ア）露出展示

- ・ 発掘調査の状況を展示し、遺構の形状や構造の理解を促進するため実施。

- ・ 適切な構造と機能を持つ覆屋内部で展示することにより、実物の迫力を伝えるとともに、遺構面の保全を両立する。
- ・ 覆屋は空調や前室を設けることで、内部の空気が急激に入れ替わることを小さくすると共に、荒天時や冬期間における見学者の避難場所ともなる。
- ・ 覆屋は、現状より高さや面積を小さくし、遺跡景観に対する影響を抑制する。
- ・ 展示遺構は現在の状況を把握した後、保存処理を行う。

(イ) 立体表示

- ・ 遺構の規模や数、位置に加え、往事の姿を示すため、実物の直上で実施。
- ・ 整備に使用する素材は、できる限り当時に近いものを使用する。
- ・ 立体表示を行う際の地形復元の盛土について、過去の整備の状況を確認し、今後の発掘調査の可能性も勘案し、必要最小限の範囲と厚さで行う。

(ウ) レプリカ展示

- ・ 保存条件等の理由により遺構の露出展示が困難な場合、遺構のレプリカにより、形状・規模・構造等を理解してもらうため実施。
- ・ レプリカは、できる限り実物に近い状況で展示し、表面の質感も実物に近い処理を施す。

イ 植生の復元

- ・ 遺跡内の植生は、現状を把握し可能な限り当時の植生を復元する。
- ・ 植生は維持管理と利活用を推進し、遺跡内の景観を、「縄文里山」へ遷移させる。
- ・ 維持管理の方法、体制整備、市民参加の方法、樹木の利活用内容等については、今後検討し、実行に移す。

ウ 施設・設備

- ・ 園路は、現在と同様の手法により改修する。
- ・ 遺跡内で行う体験学習や維持管理に使用するため、南地区に屋外電源と上水道を設置する。
- ・ 見学動線は、現在の動線を基に再構築する。
- ・ サインはできる限り景観に影響を与えないよう配慮する。また、覆屋内に設置できるものは覆屋内に設置する。

エ その他

- ・ 今後の整備では整備終了後維持管理が経済的・効率的に継続できるような構造や素材を優先的に用いる。
- ・ 北地区の整備にあたっては、部分的に盛土厚が薄い箇所もみられるため、事前の確認調査をしっかりと行うこととする。

3 設計条件の整理

(1) 対象範囲

整備の対象範囲は図1に示した。

(2) 現況(図2・3)

平成16年度までの整備により、竪穴建物跡等の立体表示や露出展示(覆屋)及び、それらをつなぐ園路等が整備されている。

旧野球場建設予定地では平成6年度の保存決定後、山砂で遺構面を最低約30cm程度覆った上に黒色土を主体とした土壌を被せている。

保存目的の発掘調査が行われた区域では、遺構保存のために山砂層を約30cm被覆している。

遺跡保存及び短期整備から20年以上が経過し、園内の立体表示や覆屋、園路等の施設は老朽化が進行している。

覆屋の老朽化に伴い、遺構の保存環境も悪化している。

遺跡の内容確認のための発掘調査の進行等により、調査・研究の成果が蓄積されてきたため、新たな調査成果を整備内容に反映する必要がある。

短期整備終了後の維持管理の問題等により、園内の特に谷部には外来種の樹木や縄文時代の景観にそぐわない針葉樹などが繁茂している。

(3) 整備対象とする遺構等

今回の整備では、以下の内容が整備の対象となる。

- ・ 環状配石墓
- ・ 大人の墓
- ・ 南の谷
- ・ 北の谷
- ・ 子供の墓
- ・ 北盛土
- ・ 南盛土
- ・ 大型掘立柱建物跡
- ・ 西盛土周辺
- ・ 植生復元・修景・縄文植物園
- ・ 便益施設
- ・ 史跡西側法面保護

4 基本設計

(1) 環状配石墓 (図4～10)

① 基本計画

- ・ 環状配石墓が道路跡に沿って並ぶ様子を示す。
- ・ 発掘状況を踏まえ、配石とマウンドを立体表示する。

② 整備手法

- ・ 整備対象遺構の直上の地表面上に立体表示を行う。
- ・ 配石部分には、発掘調査で確認した礫と同じ石質、大きさ、形状の自然礫を用いる。

③ 整備位置と対象遺構

- ・ 整備対象は第11・12・13・14・15・16・17・28号環状配石墓の8基とする (図4、図5～8)。

④ 仕様 (図5)

ア マウンド部分

- ・ マウンドは芯材を表面処理でコーティングする構造とする。
- ・ 素材はすべて土壌とし、凍上被害を抑制するため真砂土等の粗粒の土壌を用い、固化剤を混入し土壌の流出を抑制する。
- ・ マウンド表面の色調は暗褐色とする。
- ・ マウンドの高さは、視認性を高めるため、約50cmとし、裾は配石内縁までとする。
- ・ マウンドの平面形状は頂部・裾共に円形を基調とする。

イ 配石部分

- ・ 配石部分は発掘調査で得られた礫の配置を再現する。
- ・ 配石のうち、立石だったと考えられる部分は、出土状況のままとする。
- ・ 配石の礫は調査で確認した大きさや石質に準じた自然礫を使用する。
- ・ 配石の礫は下部をモルタル等で固定する。

⑤ 地下遺構の保存 (図9)

- ・ 遺構面には山砂を被覆し、その上に黒土を基本とした土壌を被覆している。
- ・ 園路に近い部分では約2mの盛土に覆われている。
- ・ 遺構直上は約1～1.5mの盛土で覆われている。
- ・ 立体表示の整備は、現地表面から約50cm以内の範囲にとどまるため、地下遺構に影響はない。

⑥ 地形復元 (図9)

- ・ 環状配石墓の構築面の傾斜を再現するため、必要に応じて盛土を行うが、今後の発掘調査も勘案し、必要最小限の範囲と厚さに抑える。

⑦ 既存物の取扱い

- ・ 既存の解説板は撤去し、新規に設置する。
- ・ 園路の新設や線形変更は行わない。

⑧ その他

- ・ マウンド及び周辺には経年により植物の繁茂が予想されるが、維持管理によりできる限り整備時の状況を維持することとする。
- ・ 時遊トンネル南側についても、今後体験学習等による整備を検討する（図 10）。

(2) 大人の墓（立体表示）

① 基本計画

- ・ 土坑墓のマウンドが道路跡に沿って並ぶ様子を示す。
- ・ 発掘状況を踏まえ、マウンドを立体表示する。

② 整備手法

- ・ 整備対象遺構の直上の地表面上に立体表示を行う。
- ・ 埋葬終了状況を再現するためマウンドを構築する。

③ 整備位置と対象遺構

- ・ 整備対象は第 21・28・30・31・32・33・36・39・40・41・46・50・51・62・63・66・69・95・103・107・114・119・122・123・175・176・177・178・280・281・282 号土坑の 31 基とする（図 11）。

④ 仕様（図 12）

- ・ マウンドは芯材を表面処理でコーティングする構造とする。
- ・ 素材はすべて土壌とし、凍上被害を抑制するため真砂土等の粗粒の土壌を用い、固化剤を混入し土壌の流出を抑制する。
- ・ マウンド表面の色調は暗褐色とする。
- ・ マウンドの高さは、視認性を高めるため、約 50 cm とする。
- ・ マウンドの平面形状は頂部・裾共に楕円形～小判形を基調とする。

⑤ 地下遺構の保存

- ・ 遺構面には山砂を被覆し、その上に黒土を基本とした土壌を被覆している。
- ・ 園路に近い部分では約 2 m の盛土に覆われている。
- ・ 遺構直上は約 1 ～ 1.5 m の盛土で覆われている。
- ・ 立体表示の整備は、現地表面から約 50 cm 以内の範囲にとどまるため、地下遺構に影響はない。

⑥ 地形復元

- ・ 現状のままとする。

⑦ 既存物の取扱い

- ・ 既存のマウンドは撤去し、新規に設置する。
- ・ 既存の解説板は撤去し、新規に設置する。
- ・ 土坑墓列が整備される範囲までは園路を延長する（図 11）。

⑦ その他

- ・ マウンド及び周辺には経年により植物の繁茂が予想されるが、維持管理によりできる限り整備時の状況を維持することとする。
- ・ 土坑墓列が整備範囲の東側に約 400 m 続くことをイメージさせるため、土坑墓が存在する部分の樹木を伐採する（図 13）。

(3) 大人の墓（露出展示）

① 基本計画

- ・ 実物の遺構を展示することで、遺構の形状と質感を示す。
- ・ 展示する遺構から土坑墓列が始まることを示す。

② 整備手法

- ・ 完掘した土坑墓を覆屋内部で露出展示する。

③ 整備位置と対象遺構

- ・ 整備対象は現在展示中の第 435 号土坑とする（図 9）。

④ 仕様（図 14）

- ・ 遺構覆屋はコンクリート基礎の上に窓を設置し、遺構が上から覗けるようにする。窓は切妻形の屋根の形状とし、遺構のメンテナンスのため上部が開閉できるようにする。
- ・ 覆屋外観は付近の景観を阻害しないよう、できる限り高さを低くする。
- ・ 窓の表面素材は、強度、耐久性と軽量化の観点から、ポリカーボネート製とする。内面には曇り止め、外面には紫外線カットの加工を施す。
- ・ 覆屋の基礎は現在のものを利用する。
- ・ 雨水の流れ込みは、覆屋の機密性をあげることで対処可能である。ただし、現在運用している換気ファンは、結露防止のため、再利用を検討する。

⑤ 地下遺構の保存

- ・ 覆屋を改築することで遺構を展示しながら保存する。
- ・ 遺構の周辺は、遺構面上に約 50 cm の盛土が施されている。

⑥ 地形復元

- ・ 新たな地形復元はせず、現状のままとする。

⑦ 既存物の取扱い

- ・ 既存の解説板は撤去し、新規に設置する（図 11）。
- ・ 周囲の園路については、改修の際に隙間等を解消する（図 11）。

⑧ その他

- ・ 今後の保存処理や遺構面の維持管理に必要な情報を得るため、現状の覆屋や遺構の状況について、実施設計時に詳細に観察を行う。

(4) 南の谷・北の谷

① 基本計画

- ・ 沢地形を視認しやすくし、縄文時代の集落の地形を示す。

② 整備内容

- ・ 谷部の地形を視認しやすくするため、現在繁茂している樹木を伐採する。
- ・ 南の谷については、谷の環境を把握し、その維持を行う。

③ 整備位置

- ・ 南の谷は、図 16 の範囲の樹木を伐採する。
- ・ 北の谷は、図 17 の範囲の樹木を伐採する。

④ 仕様

- ・ 樹木調査の結果、南の谷には図 16 のような樹木植生が確認できたため、図に示した範囲の樹木を伐採し、残したものを維持管理する。
- ・ 樹木調査の結果、北の谷には、図 17 に示した範囲内にニセアカシアやヤナギなど不要な樹木が繁茂しているため、この範囲内の樹木を伐採する。
- ・ 伐採の範囲と手順については、谷内部の環境を悪化させないように慎重に検討する。
- ・ 南の谷では谷内部に水芭蕉が咲くなど、環境が良い状況が見られるため、これを維持する管理を行う。

⑤ 地下遺構の保存

- ・ 南の谷付近は、第 1 期整備時に斜面部が約 1 ～ 1.5m の盛土で覆われている。また、伐根は行わないため、地下遺構への影響はない。
- ・ 北の谷付近は発掘調査終了時に約 1 ～ 1.5m の盛土で覆われている。また、伐根は行わないため、地下遺構への影響はない。

⑥ 地形復元

- ・ 現状のままとする。

⑦ 既存物の取扱い

- ・ 南の谷をまたぐ園路の下に見える暗渠管は、園路改修時に景観に配慮したものに取替える。
- ・ 既存の案内サインを撤去し、内容を見直した上で新設する。

⑧ その他

- ・ 北の谷の既存の解説板は撤去し、新規に設置する。
- ・ 南の谷には、新規に解説板を設置する。

(5) 子供の墓

① 基本計画

- ・ 整備計画ではレプリカ及び立体表示により遺構の位置と広がりを示す予定。
- ・ 当面、実物の遺構が密集して残されている現覆屋内の出土状況を生かし、覆屋を改築することで遺構の位置や特徴を示す。

② 整備手法と手順

- ・ 埋設土器の確認状況を覆屋内で露出展示する。
- ・ 遺構面の養生をした上で覆屋を撤去し、規模を縮小した覆屋を設置する。
- ・ 覆屋設置前に排水設備を施工する。
- ・ 覆屋設置後、観覧園路からのアプローチ用園路を設置する。
- ・ 園路改修後、遺構面の養生を除去し、遺構の保存処理を行う。

③ 整備位置と対象遺構

- ・ 現在の覆屋を撤去し、同じ場所に規模を縮小した覆屋を新設する（図 18）。
- ・ 対象遺構は現在展示中の埋設土器 23 基とする（図 19）。

④ 仕様（図 18）

- ・ 覆屋の規模は、高さと面積を現状のものより抑えたものとする。
- ・ 屋根形状は現状のドーム型ではなく、かまぼこ形あるいは片流れ等が考えられる。
- ・ 屋根勾配は自然落雪が起こる程度とする。
- ・ 出入口部には前室を設け、空気の急激な入れ替わりを抑制する。
- ・ 屋根・壁等の断熱とエアコンにより、内部の温湿度をコントロールする。
- ・ 窓は遺構面に直接光が到達しない足下部分の採光に留める。
- ・ 融雪時や大雨時の雨水対策として、排水施設を新設する。
- ・ 解説板を覆屋内部に設置する。

⑤ 地下遺構の保存（図 19）

- ・ 覆屋を設置することで遺構を展示しながら保存する。
- ・ 覆屋改築時は遺構面を土嚢と砂で被覆する。
- ・ 覆屋改築後に遺構面の保存処理を行う。
- ・ 展示範囲の周辺には約 1 m の盛土が行われている。

⑥ 地形復元

- ・ 現状のままとするが、覆屋基礎に必要な最小限の盛土は行う。

⑦ 既存物の取扱い

- ・ 現状の覆屋は基礎まで撤去する。
- ・ 既存の解説板も撤去し覆屋内に新設する。
- ・ 既存の見学通路舗装は必要な範囲を活かすこととする。
- ・ 既存の園路は覆屋の出入口配置に合わせ改修を行う。

(6) 北盛土

① 基本計画

- ・ 整備計画では地表面上に土器破片のレプリカ等を設置し、遺物の廃棄状況を表示する予定。
- ・ 当面は、土器が一面に広がる状況が保存されている現覆屋を改修し、露出展示を継続する。
- ・ 北盛土の範囲も地表面に表示する。

② 整備手法と手順

- ・ 盛土における土器の出土状況を、覆屋内で露出展示する。
- ・ 盛土の平面的な範囲を草地植栽の刈り丈の違い等により地表面に表示する。
- ・ 遺構面の養生をした上で覆屋屋根を改修する。
- ・ 覆屋設置後、観覧園路からのアプローチ用園路を設置する。
- ・ 覆屋撤去前に現状の展示遺構断面の保存状況調査を行い改築後の保存処理方法の参考とする。
- ・ 覆屋改修後、遺構面の保存処理を行う。

③ 整備位置と対象遺構

- ・ 覆屋は現状の屋根を改修する。
- ・ 露出展示は現状の範囲と同一とする。

④ 仕様 (図 20)

- ・ 現覆屋の基礎の外側に断熱材を追加する。
- ・ 改修後の覆屋は機密性と断熱性能を高め、屋根形状は現状と同様とする。
- ・ 出入口部には前室を設け、空気の急激な入れ替わりを抑制する。
- ・ 屋根・壁等の断熱とエアコンにより、内部の温湿度をコントロールする。
- ・ 解説板を覆屋内部に設置する。
- ・ 覆屋へのアプローチのため、園路を新設する。

⑤ 地下遺構の保存 (図 21)

- ・ 覆屋を改修することで遺構を展示しながら保存する。
- ・ 遺物の出土状況の周囲の段差を土壌の充填により解消し、乾燥や崩落を防止する。
- ・ 覆屋改修後に遺構面の保存処理を行う。
- ・ 展示範囲の周辺には約 1 m の盛土が行われている。
- ・ 新設する園路範囲には遺構面から約 50 cm の盛土が行われているが、実施設計の前に確認調査を行うこととする。

⑥ 地形復元

- ・ 新たな盛土は行わない。

⑦ 既存物の取扱い

- ・ 既存の覆屋は、屋根の改修を行う。

⑧ その他

- ・ 健全度を調査した上で、覆屋の基礎は再利用する。

(7) 南盛土

① 基本計画

- ・ 発掘調査で掘削したトレンチを展示することで、盛土の重なる状況や、厚さ、遺物の包含状況等を示す。
- ・ 南盛土の範囲も地表面に表示する。

② 整備手法

- ・ 現状の覆屋屋根を改修する。
- ・ 盛土の土層断面を、覆屋内で露出展示する。
- ・ 盛土の平面的な範囲を草地植栽の刈り丈の違い等により地表面に表示する。
- ・ 覆屋撤去前に現状の展示遺構断面の保存状況調査を行い改築後の保存処理方法の参考とする。

③ 整備位置と対象遺構

- ・ 覆屋は現状の屋根を改修する。
- ・ 露出展示する断面は現状の範囲と同一とする。

④ 仕様（図 22）

- ・ 現覆屋の基礎の外側に新たな基礎を設置し、屋根も新たに設置する。
- ・ 覆屋周囲に排水溝を再設置し、覆屋内部への雨水の浸入を抑制する。
- ・ 屋根形状は現状と同様とし、素材や色調により周囲になじむようにする
- ・ 出入口部には前室を設け、空気の急激な入れ替わりを抑制する。
- ・ 屋根・壁等の断熱とエアコン等により、内部の温湿度をコントロールする。
- ・ 解説板を覆屋内部に設置する。
- ・ 覆屋へのアプローチのため、園路を新設する。
- ・ 盛土の範囲表示は、植生の違いによる表示等が考えられるが、実施設計までに検討する。

⑤ 地下遺構の保存（図 23）

- ・ 覆屋を設置することで遺構を展示しながら保存する。
- ・ 展示範囲の周辺には約 50 cm 盛土が行われている。
- ・ 新設する園路範囲は、発掘時のトレンチが存在するため、その部分を利用する。
- ・ 実施設計の前に確認調査を行うこととする。
- ・ 遺構面の保存状況を確認し、展示中の盛土断面の保存処理を行う。

⑥ 地形復元

- ・ 現状のままとする。

⑦ 既存物の取扱い

- ・ 既存の覆屋は、撤去する。
- ・ 解説版は撤去し、覆屋内部に新設する。

⑧ その他

- ・ 覆屋の基礎は、現状の健全度を調査した上で再利用する。

(8) 大型掘立柱建物跡

① 基本計画

- ・ 整備計画では、柱穴跡の複製を地表面に展示する予定。
- ・ 検討の結果、現状の覆屋内での展示を活かし、覆屋を改築する。

② 整備手法と手順

- ・ 大型掘立柱建物跡の柱穴発掘状況のレプリカを覆屋内で露出展示する。
- ・ 遺構面の養生をした上で覆屋を撤去し、規模を縮小した覆屋を設置する。
- ・ 覆屋設置前に排水設備を施工する。
- ・ 覆屋設置後、観覧園路からのアプローチ用園路を設置する。
- ・ 園路改修後、展示面の養生を除去し、レプリカの保存修理を行う。

③ 整備位置と対象遺構

- ・ 現在の覆屋を撤去し、同じ場所に規模を縮小した覆屋を新設する。
- ・ 対象遺構は現在展示中の第26号掘立柱建物跡とする。

④ 仕様(図24)

- ・ 覆屋の規模は、高さと面積を現状のものより抑えたものとする。
- ・ 形状は現状のドーム型ではなく、かまぼこ形あるいはビニルハウス形が考えられる。
- ・ 出入口部には前室を設け、空気の急激な入れ替わりを抑制する。
- ・ 屋根・壁等の断熱とエアコンにより、内部の温湿度をコントロールする。
- ・ 窓は足下の採光用以外基本的に設置しない。
- ・ レプリカは、現状のものを修繕し使用する。
- ・ 融雪時や大雨時の雨水対策として、排水施設を改修・新設する。
- ・ 柱穴レプリカ底面に排水ポンプを仕込み、覆屋外へ排水する。
- ・ 解説板を覆屋内部に設置する。

⑤ 地下遺構の保存(図25)

- ・ レプリカの直下に遺構が保存されており、覆屋を設置することで展示しながら保存する。
- ・ 展示範囲の周辺には約1mの盛土が行われている。

⑥ 地形復元

- ・ 新たな盛土は行わない。

⑦ 既存物の取扱い

- ・ 現状の覆屋は基礎まで撤去する。
- ・ 既存の解説板も撤去し覆屋内に新設する。
- ・ 既存の見学通路舗装は必要な範囲を生かすこととする。
- ・ 既存の園路は覆屋の出入口配置に合わせ改修を行う。

(9) 西盛土周辺

① 基本計画

- ・ 整備計画では、北地区全体を見渡す視点場と園路を設置する。
- ・ 現園路からの眺望は有益であるため、園路の脇に見学者が滞留できるスペースを新設する。
- ・ 西盛土は現状の樹林に有用な樹木が多いため、択伐と維持管理と利活用により、縄文里山として整備していく。

② 整備内容

- ・ 不要な樹木を伐採し、体験活動に利活用できる樹林として維持管理を行う。
- ・ 図 26 の地点に見学者が滞留し、北地区を眺められる視点場を設置する。

③ 遺構保存及び維持管理

- ・ 付近で発掘調査を行った範囲では、遺構面に山砂を被覆し埋め戻している。
- ・ それ以外の未調査部分は、盛土等を行われていない。
- ・ 現状では樹木が繁茂しているため、高木化しないよう適切な管理を行う。
- ・ 維持管理の内容は、下草刈り・枝拾い・高木の伐採等が考えられる。
- ・ 維持管理と共に、木の実等の資源を活かした体験学習などにも活用する。

(10) 植栽・修景・縄文植物園

① 植栽 (図 27)

- ・ 現在の植生を把握し、不要なものは除去し、選択して生かし、維持管理を徹底する。
- ・ 現在供用中の範囲では、南の谷・北の谷・西盛土周辺等で重点的に実施するほか、未供用区域の植生についても積極的に管理する。
- ・ 最終的には集落内外にクリが目立つような縄文里山的な景観を目指す。
- ・ 記念植樹の樹木は、別の場所で生かす手立てを検討する。

② 修景 (図 27)

- ・ 主に遺跡北側から東側にかけての史跡外周に、スギ・カラマツ・メタセコイア等の針葉樹林が現存している。これらの樹林は、遺跡外に見える建築物等を遺跡内から見えなくする視界の遮蔽の役割を担っている。
- ・ H9 年度策定の基本計画では、縄文時代の三内丸山遺跡に存在しないこれらの樹木を段階的に広葉樹林へ変換していくことが記載されている。
- ・ 視界の遮蔽に必要な高さを確認した上で、針葉樹から広葉樹に変換が可能だと判断される場合は、順次クリ・クルミ・コナラ等の広葉樹林への変換を行う。
- ・ 針葉樹の伐採は、広葉樹への変換を助けるよう計画的に行う。

③ 縄文植物園

- ・ 南地区の南東側に第1期整備でフジやサルナシ等の植物を這わせる棚を7棟整備。
- ・ 維持管理の問題や、主要動線から遠いこと等から利用されていないため、主要動線から近い場所に新設する (図 28)。
- ・ 南の谷の樹木伐採により残る樹林と、クリ・ブナの試験植栽範囲と一体で縄文時代の植物を楽しめるような整備を行う。
- ・ 現在の縄文植物園に存在するサルナシ・ヤマブドウなどに加え、ニワトコ等も植栽し、見学者が果実のなる様子を間近に見られるようにする。
- ・ 樹木等の利活用を促進しながら縄文里山的な景観を目指す。
- ・ ブナ・クリの試験植栽も、根の張り具合や防根シートの状況、植栽方法の違いなどによる生育の違いなどの現況を調査し、必要に応じて伐採し活用する。

(11) 便益施設

① 園路 (図 29)

- ・ 設置後 15 年以上経過した園路は舗装が痛んでいるため改修する。
- ・ 表面の舗装は、ウッドチップを混ぜ込んだアスファルトに着色したものである。
- ・ 舗装材料を比較検討した結果、現状の舗装材料が適していると判断したため、同じ仕様で改修を行う。
- ・ 園路の線形は基本的に変更しないが、覆屋等の改修・新設によりアプローチ方法が変更になる部分は、線形を見直す。
- ・ 基本的に表面舗装部分のみの改修を行う。
- ・ 園路の下には 1～2 m 弱の盛土が行われているため、表面舗装の改修による地下遺構への影響はない。

② 屋外電源 (図 30)

- ・ 屋外で利用できる電源が南地区にはないため、電源を設置する。
- ・ 既存の照明用配線を使用し、屋外コンセントを設置する。
- ・ 掘削を伴う工事は必要ないため、地下遺構への影響はない。

③ 上水道 (図 31)

- ・ 維持管理や体験活動などに利用できる上水道が南地区にないため、上水道を設置する。
- ・ 公園台帳に記載のある既設の上水管を使用し、蛇口を設置する。
- ・ 公園台帳に記載がある上水管が実際に存在するかどうか、掘削して確認する必要がある。
- ・ もし確認できなかった場合は、新規に埋設することとなるため、確認調査が必要となる。

(12) 史跡西側法面保護（図 32）

① 現状

- ・ 史跡西側境界付近にある崖面の最上部の表土が流出しており、史跡範囲を侵食しかねない状況である。
- ・ 崖面の大部分は火砕流堆積物を主体とした地山であり、堅く締まっており崩落の心配はほぼ無い。

② 整備手法

- ・ 表土が流出している部分の樹木を伐採し、肩部分に傾斜を付け、その部分に草を生やすため植生マット工を施工することで、表土流出を防ぐ。

③ 地下遺構の保存

- ・ 樹木の伐採と表土の除去を行うため、慎重に扱う必要がある。

(13) サイン・史跡標識（図 33）

- ・ 解説サインについては、現状より規模を小さく、高さを低くすることとする。
- ・ 屋外に設置する解説サインについては、冬期間の積雪で見えなくならないよう、支柱の長さを変えられる仕様とする。
- ・ 史跡標識は、新規に図の位置に設置し、現状のものは撤去する。

5 事業計画

(1) 整備スケジュール

・整備スケジュールは、以下の通りとする。

	令和2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	
環状配石墓(立体表示)	基本設計										次期整備計画の検討
大人の墓(立体表示)											
南の谷											
北の谷											
大人の墓(覆屋改修)											
子供の墓 (覆屋改築)											
北盛土 (覆屋改修)											
大型掘立柱建物跡 (覆屋改築)											
南盛土(覆屋改修)											
西盛土周辺 (視点場設置)											
園路・排水溝・電気											
史跡境界法面保護											

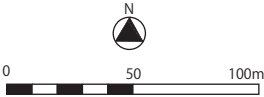
実施設計

既存覆屋撤去

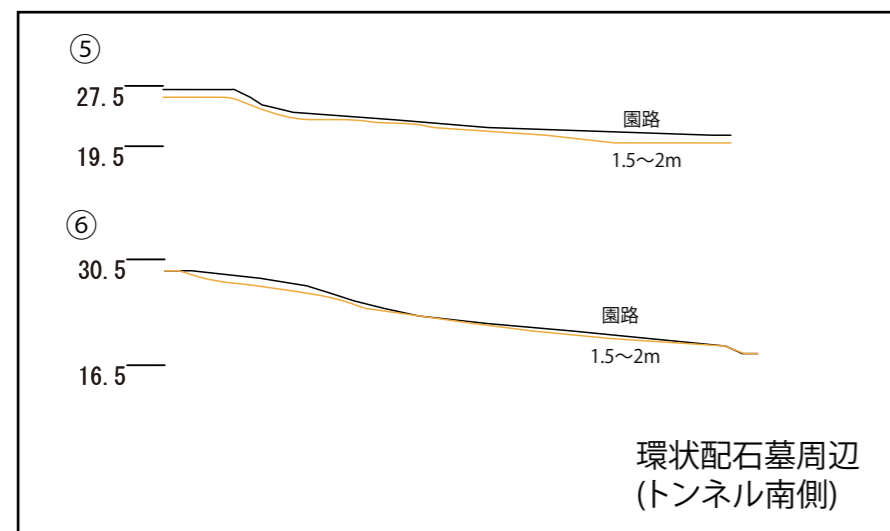
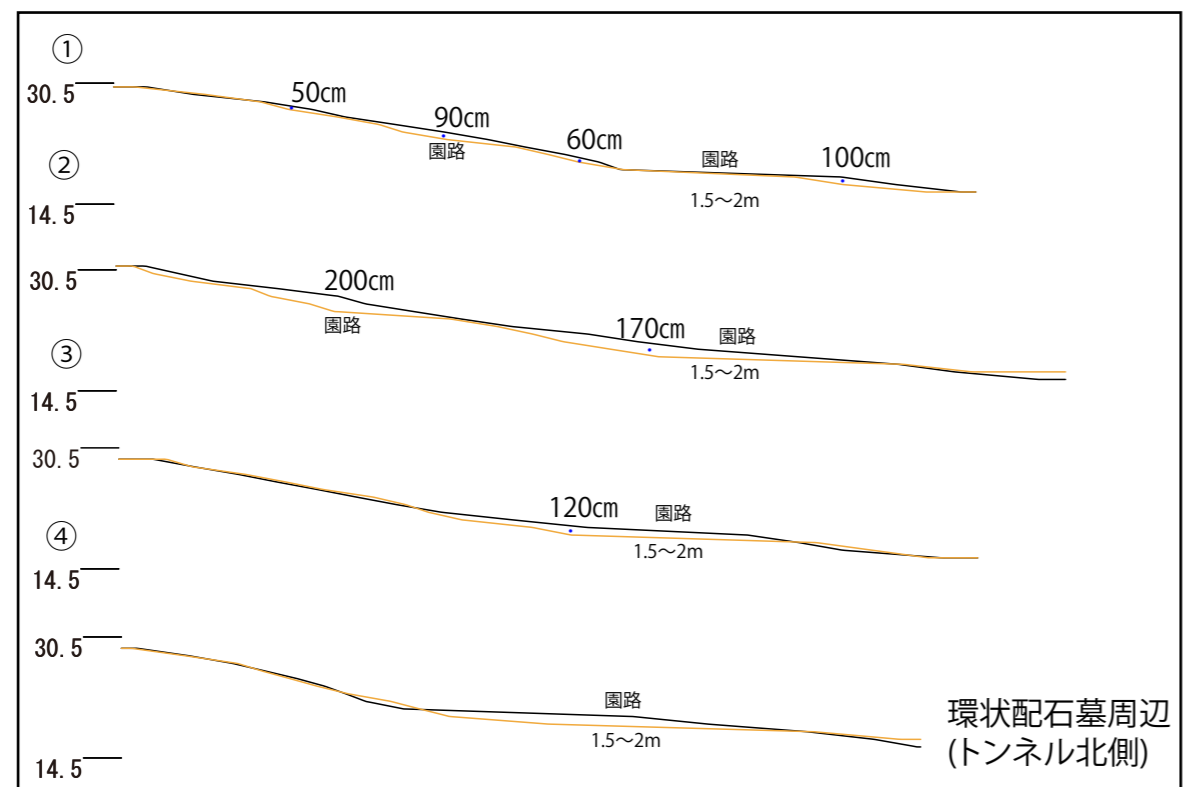
整備工事

凡 例			
	特別史跡範囲		解説サイン
	未供用範囲		案内サイン
	露出展示覆屋整備		史跡標識
	立体表示整備		世界遺産共通サイン
	植栽整備 (広葉樹等伐採)		屋外電源
	法面保護工事範囲		上水栓

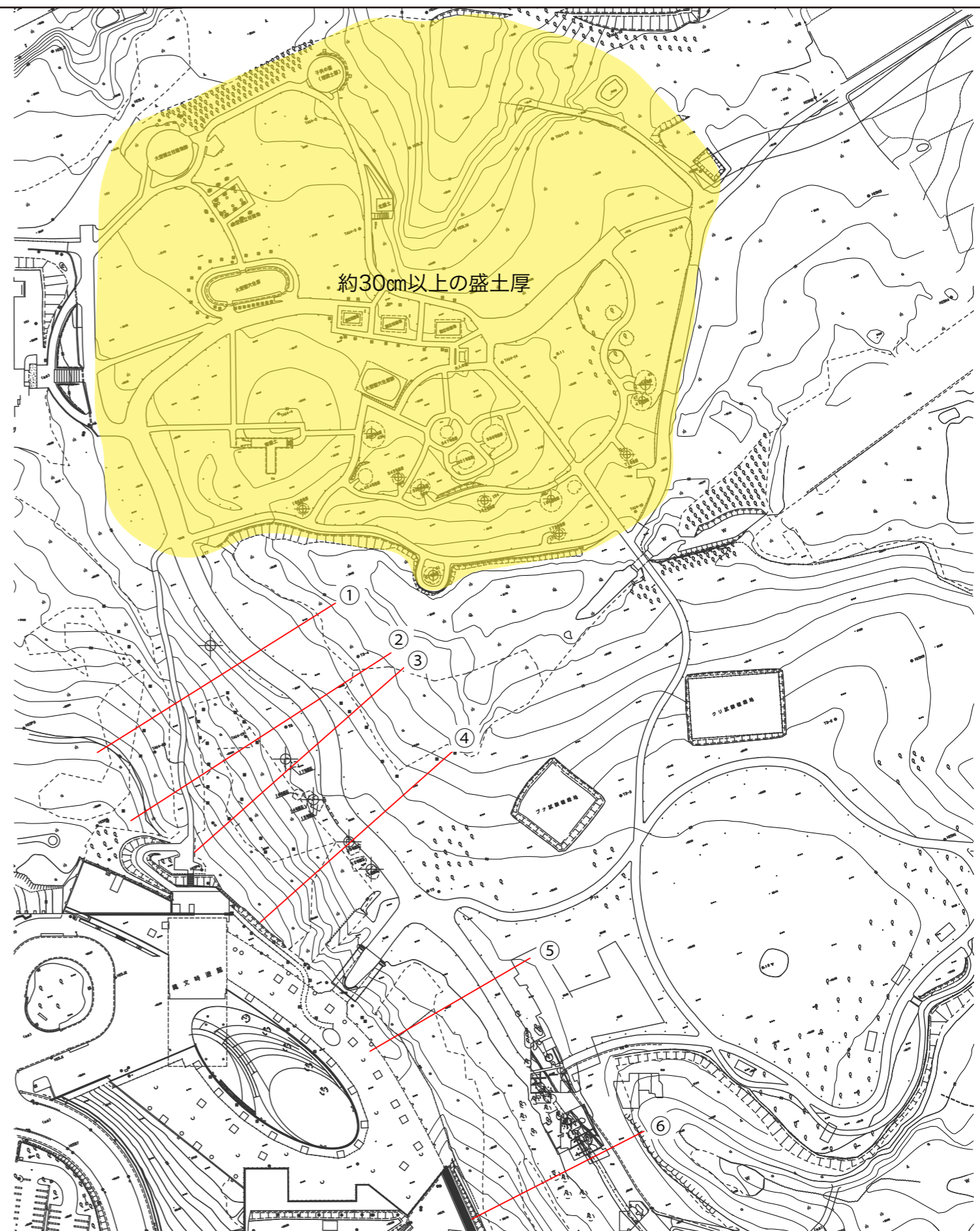
- (1) 環状配石墓
(2) 大人の墓(立体表示)
(3) 大人の墓(露出展示)
(4) 北の谷・南の谷
(5) 子供の墓
(6) 北盛土
(7) 南盛土
(8) 大型掘立柱建物跡
(9) 史跡西側法面保護



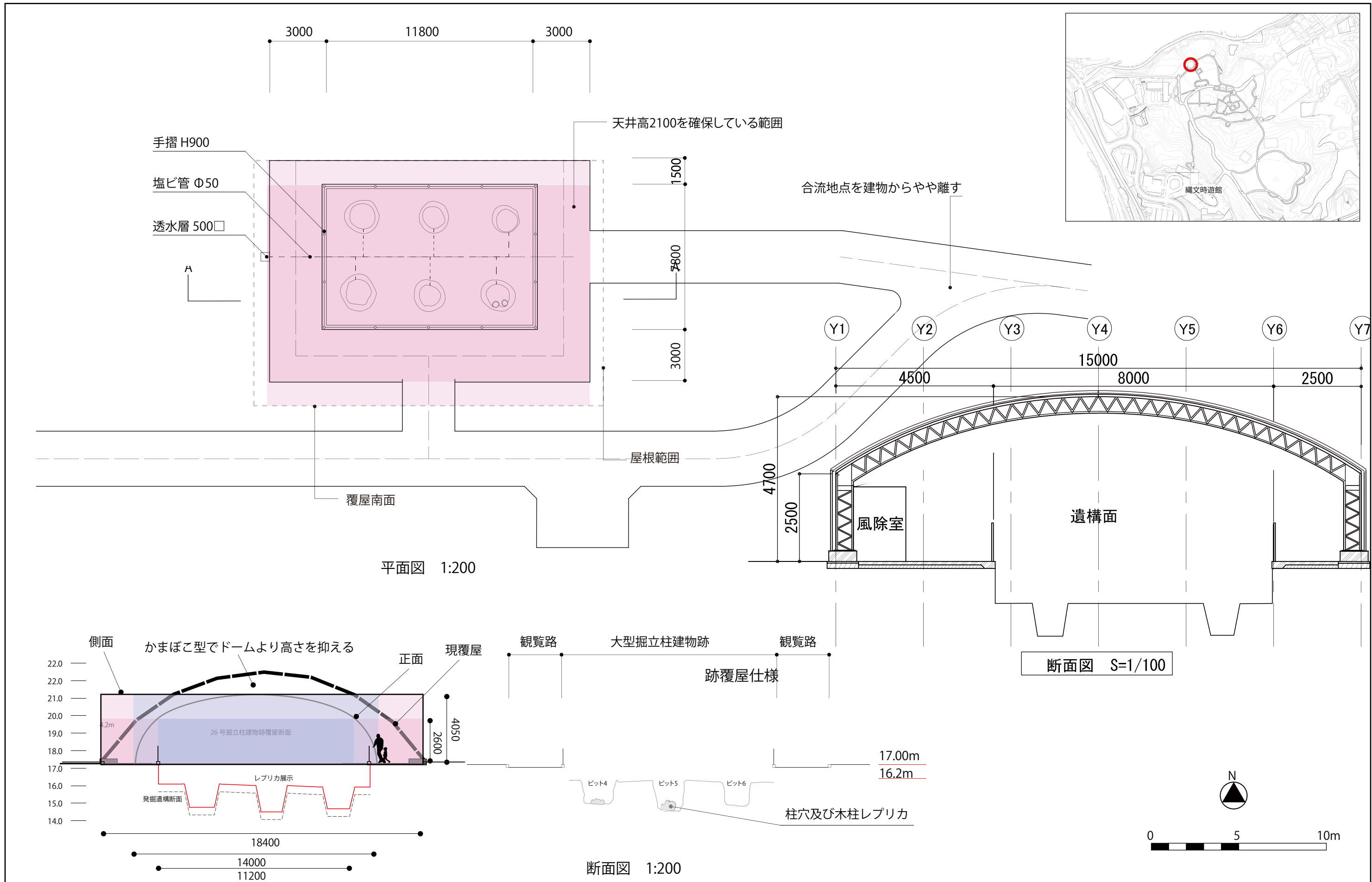
三内丸山遺跡センター 株式会社パスコ	特記事項	1	縮尺	1/3000	業務名称	三内丸山遺跡史跡整備基本設計作成業務委託	図番号 02/35
		2	製作年月日	令和3年3月	図面名称	整備対象位置図	
		3					
		4					



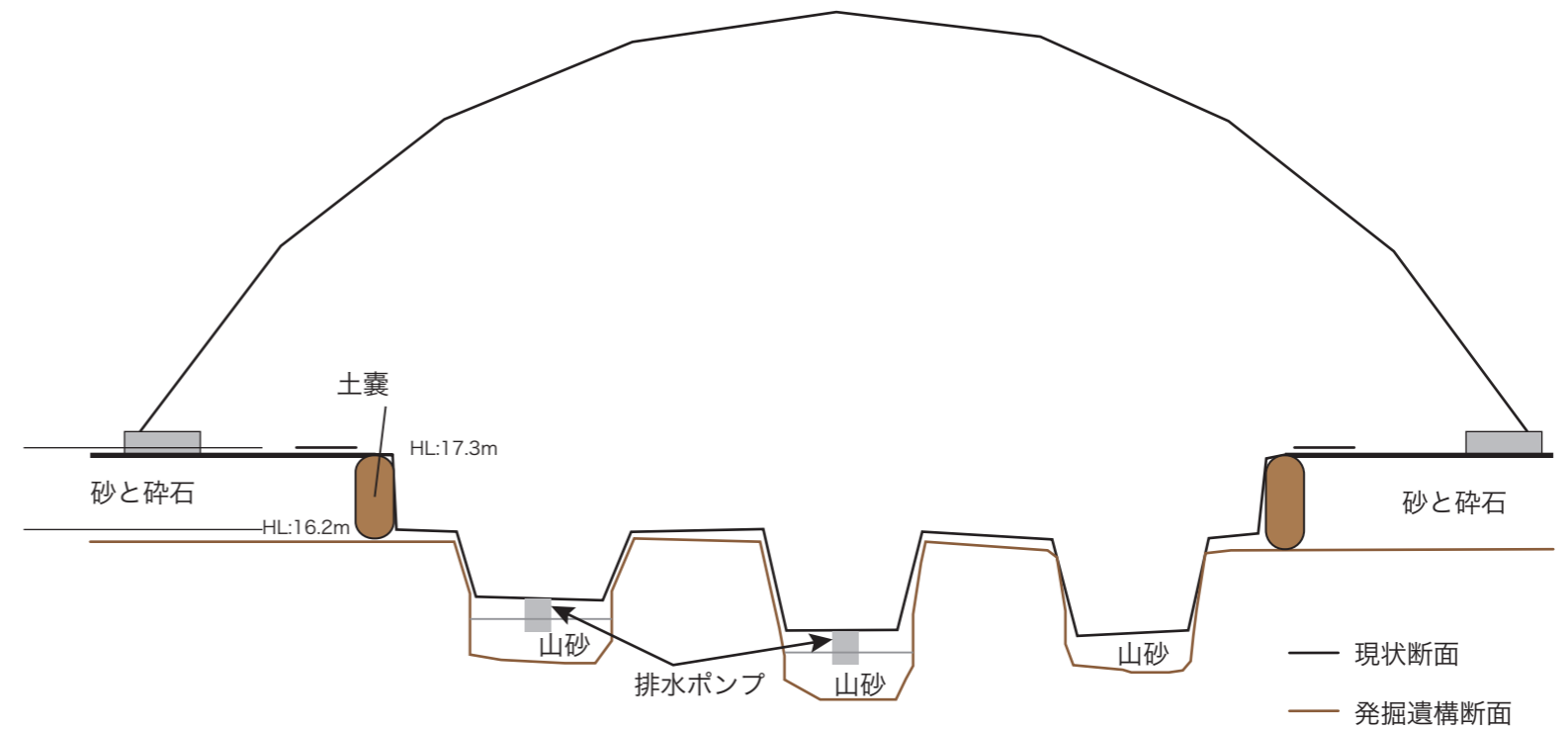
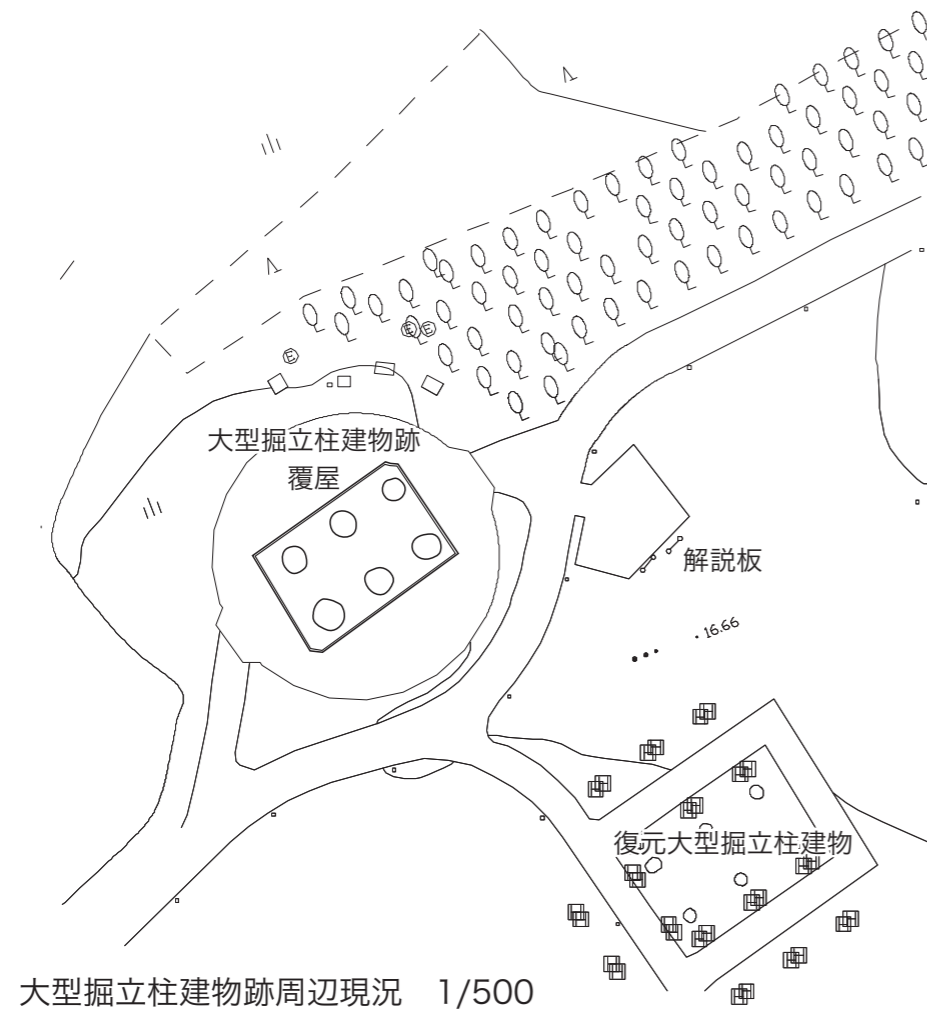
過去の整備における盛土範囲 1/2000



三内丸山遺跡センター 株式会社パスコ	特記事項	1	縮尺	1/2000	業務名称	三内丸山遺跡史跡整備基本設計作成業務委託	図番号 03/35
		2	製作年月日	令和3年3月	図面名称	過去の整備における盛土範囲と断面図	
		3					
		4					



三内丸山遺跡センター 株式会社パスコ	特記事項	1	縮尺	1/20	業務名称	三内丸山遺跡史跡整備基本設計作成業務委託	図番号 26/35
		2	製作年月日	令和3年3月	図面名称	大型掘立柱建物跡覆屋仕様	
		3					
		4					



柱穴底面の保護状況（水中ポンプを仕込んである）



遺構壁面に養生した後にガラス繊維吹きつけ（現状はこの上に擬土貼り付け）

三内丸山遺跡センター 株式会社パスコ	特記事項	1	縮尺	図示	業務名称	三内丸山遺跡史跡整備基本設計作成業務委託	図番号 26/35
		2	製作年月日	令和3年3月	図面名称	大型掘立柱建物跡の遺構保存状況	
		3					
		4					